

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 李 璐

論 文 題 目

中国人日本語学習者による間接発話行為の理解

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	玉岡 賀津雄
委員	名古屋大学教授	杉村 泰
委員	名古屋大学准教授	鷲見 幸美
委員	東北大学准教授	木山 幸子

## 論文審査の結果の要旨

本博士論文は、テスト調査、インタビュー法、実験、口頭談話完成タスクなどの多様な手法を使用して、中国人日本語学習者による間接発話行為の理解を、実証的に研究した。以下、本論文の概要と評価結果を報告する。

### 【本論文の概要】

本論文は8つの章からなる。

**序章**では、研究対象、研究対象の位置づけ、研究の目的、本論文の構成を記述した。

**第2章**では、間接発話行為の理解に関する理論的・実証的先行研究をまとめている。その後、先行研究の問題点を指摘し、本論文の課題を明らかにした。

**第3章**では、慣習性および日本語習熟度が間接発話行為の理解の正確さにどう影響するかをテスト調査で検討した。中国人日本語学習者47名に対して、慣習・非慣習的な間接発話行為の理解テストを実施した。また、クローズテストで日本語の習熟度を測定し、下位・中位・上位の3群に分けた。分析の結果、(1)慣習的な間接発話行為の理解のほうが非慣習的な間接発話行為よりも正答率が高かった。(2)日本語習熟度が学習者の間接発話行為の理解を促進した。ただし、慣習・非慣習的な間接発話行為の理解には、日本語習熟度が異なるパターンで影響しており、(3)慣習的な間接発話行為は、中位群レベルまでに理解ができるようになったが、(4)非慣習的な間接発話行為は、日本語能力の向上に伴って、下位群から上位群へと徐々に理解が進んだ。

**第4章**では、中国人日本語学習者30名に対して、間接断り、慣習・非慣習的な間接意見からなる12項目の間接発話理解課題の理解過程に関する口頭報告をインタビュー法で収集した。これらの30名を日本語のクローズテストで上位・下位の両群に分けた。その後、上位・下位群の学習者は、間接断り、慣習的な間接意見、非慣習的な間接意見を理解する際に、それぞれどのような文脈情報を理解の手がかりとして使ったか、何が難しかったのかを計量的に検討した。

**第5章**では、Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, Martin & Clubley (2001) の5つの下位尺度からなる「自閉症スペクトラム指数(AQ)」モデルと Lau, Gau, Chiu, Wu, Chou, Liu & Chou (2013) の5因子のAQモデルのいずれが適切であるかを、中国語翻訳版を作成して、355名の中国人健常者に実施し、確認的因子分析のモデル適合度指標で比較検討した。いずれのモデルも、本研究のデータと合致した適切な指標を示さなかった。そこで、Baron-Cohenら(2001)のオリジナルのAQ50を基に、各下位尺度の確認的因子分析から貢献度の高い項目を5つずつ抽出して25の質問項目からなる簡易版のAQ25を作成した(医学系学術誌に掲載)。AQ25は、データは正規分布に近く、またクロンバックの信頼性係数も高く、再検査法での信頼性係数も高かった。中国語版AQ25は短い時間で効率よく健常者の自閉症スペクトラムを5つの下位尺度で測定することができ、現場の臨床的な使用に有効だと思われる。

## 論文審査の結果の要旨

**第6章**では、Taguchi (2008c) の日本語の間接発話理解課題の内容、提示方法を修正・改善した上で、中国人日本語学習者 65 名を対象に実施し、学習者の間接発話行為の理解の正確さおよび速さを実験で調べた。また、学習者の聴解力、語彙アクセスの効率性（正確さと速さ）、自閉傾向を実測し、この3つの背景要因が間接発話行為の理解の正確さおよび速さに影響を与えるかを検討した。その結果、(1) 間接発話理解の速さについて、学習者の語彙アクセスの速さが有意に影響した。(2) 間接発話理解の正確さについて、学習者の聴解力および語彙アクセスの正答率が有意に影響した。なお、自閉傾向からの影響がみられなかった。これは、間接発話理解処理の異なる2つの側面を反映し、それぞれ異なった要因が影響したことを示した。

**第7章**では、中国人日本語学習者 98 名を対象に、日本語で音声提示された「依頼」「誘い」「断り」の3種類の間接発話行為に対して、口頭で適切に対応できるかどうかを考察した。学習者が間接発話行為に対する理解から対応までのプロセスに関する、字義的意味が理解された後に、話し手の意図的意味が推論され、適切な対応に至るという理解・推論・対応の3つの段階を仮定した。そして、学習者の産出した対応を3つの段階で、「①意味不明」「②字義的表現による対応」「③語彙と文法の誤りを含む対応」「④適切な対応」の4つに分類した。その結果、約6割の学習者が間接発話行為に適切に対応できていた。全体として、3種類の間接発話行為ごとに、3つの段階の4つの対応において異なる反応のパターンがみられた。

**第8章**は、各章のまとめ、本論文の意義、本論文の限界と今後の課題をまとめた。

### 【審査委員会による審議および合否判定】

口述試験を、令和2年(2020年)9月17日午後4時から7時まで ZOOM で開催した。学位申請者から博士論文の内容に関して、説明が行われた後、審査員から質疑応答が行われた。審査員全員が、3年間という限られた期間で、テスト調査、インタビュー法、実験、口頭談話完成タスクなど多様な手法で中国人日本語学習者の間接発話行為の理解を多角的な視点から検討したこと、また、臨床心理学の分野で議論されている「自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorder)」についても研究を展開したことを高く評価した点で一致した。一方、間接発話理解テスト・実験のデザイン、間接発話行為の理解の正確さおよび速さに影響を与えると考えられる背景要因の設定、また、自閉症スペクトラム指数に関しては、収集したデータの採点方法など、今後さらに改善する余地がまだあるという指摘もあった。質疑応答における審査員の内容確認や質問に対して、学位申請者から適切な回答が得られた。審査員からいただいた改善点は、今後の課題とした。全体として本論文は質量ともに博士課程後期の学位論文としての基準を十分に満たしていることについて、審査委員会の全員が同意した。したがって、本論文を合格と判断した。